

＜第1分科会＞

「家庭・地域を巻き込んだ北小元気アップの取組み」

指導助言者 吹田市教育委員会学校教育部保健給食室
主幹・指導主事 盛園 直人

発表から、鳥飼北小学校が積極的かつ継続的に食育を行っている様子がうかがえた。朝食喫食率が8割以上を維持できていることや給食の残食率1%以下（全国平均約6.9%：環境省調査2015）という数値がその成果と言える。食育の視点の1つ、食事の重要性に関わる知識・技能には、「朝食をとるなど食事は規則正しくとることが大切であり、心と体を活動できる状態にし、持てる力を十分に発揮できるようになることなど、食事の重要性や食事の喜び、楽しさを理解できるようにする（一部抜粋）」とあるが、鳥飼北小学校の児童は、食への関心を高めるための様々な取組みを通して、食事の重要性を理解し、感謝する心を育むことができているといえる。また、教科等における指導において教科等横断的な視点を大切にしていること、学校共通ルールを基にした教職員研修を実施した上で給食指導を行っていること、地域と連携し地場産物を活用しながら食に関する指導を行っていることなどから、学校教育活動全体で食育の推進に取り組んでいることがわかる。

では、鳥飼北小学校が良い取組みを行っているにも関わらず、なぜ朝食の喫食率が全国平均84.8%と比べると低く、向上が見られないのだろうか。また、なぜ休日の朝食喫食率が77%と、平日よりも低いのだろうか。今後はその原因を探り、児童の食に関する課題をより明らかにした上で新たに目標を設定し、学校・家庭・地域で指導に向けた具体的な方策を共有する必要がある。例えば、成果指標の評価項目（食に関する指導の手引）のうち、食に関する意識の改善状況【「朝食をとることは大切である」と回答した割合】を、食習慣の状況【朝食を「毎日食べる」と回答した割合】と比較することで、児童の意識と行動のズレを把握することができる。その上で、児童が朝食を食べない理由が、「食べる時間がない」「食欲がない」などであれば児童の生活習慣や生活リズムに、「朝食が用意されていない」「いつも食べない」などであれば、家庭環境に要因があるとも考えられる。このように成果指標の振り返りや校内で実施している生活習慣チェックカードの結果分析、必要であればチェック項目の見直しなどを進め、指導計画の策定に活かすことが、食育推進体制のさらなる充実へとつながるだろう。

食育を推進するに当たり、根本的な役割を果たすのはやはり家庭である。従って、保護者の理解と協力を得ながら、家庭における食生活や生活習慣等の実態についても把握し、新たな食に関する指導目標を設定することが必要である。理解と協力を得るための具体的な方策としては、定期的な食育だよりの発行、学校ホームページでの授業や活動の紹介、保護者講演会や授業参観の実施などが挙げられる。そして、学校で学んだことを家庭の食事で実践するなど、家庭においても食に関する取組みを充実させ、児童や教職員だけではなく、家庭・保護者の食育に関する意識も変化させていくことが大切であり、家庭を巻き込んだ取組みをより進めてもらうことが望まれる。

また、今回の発表の中で出てきた「納豆作り」や摂津市の伝統野菜である「鳥飼なすの栽培」などは、地域の協力がなければ進めることができない貴重な取組みである。このように地域との連携も同時に進めていくことで、より学びを深めることができるだろう。

長期的な視点で考えると、現在学校で学んでいる子どもたちは将来の保護者や地域の住民になり得る。今実践している食に関する指導は、未来の子どもたちを支える家庭・地域の基盤づくりにもつながっているという視点をもって、学校・家庭・地域等が連携した食育推進体制のさらなる充実を図ってもらいたい。